

続モーグルズ・フェイブルズ

後宮からの逃走

夢遊星人

第6話 ホイレカ

1.

パチパチと火のはぜるような音がしました。ワタ氏は重苦しい不安と、堪らない息苦しさに目を覚ましました。周り一面火の海でした。驚きよりもなによりも、その時の光景は一生忘れられないでしょう。真っ赤に焼けた天井、一本一本の肋骨が炎に包まれて、所々の隙間に、地獄のような暗黒が口を開けています。ワタ氏は、一瞬われを忘れて、そのものすごい火焰地獄に見入っていました。それから、やっと自分が今どんな状況にいるか、覚りました。覚ったといっても、その時はもうすっかり煙にやられていて、意識朦朧、身動きさえできませんでした。自分の毛髪が、ちりちりと焼ける音がする。四面には炎の柱が、高く高く伸び上がって、それが次第しいに、こちらへ崩れてくる。突然、ゴオと鳴ると、自分の上に火の粉がおおいかぶさりました。なにかもかもが真っ赤に燃え上がって、ワタ氏は意識を失いました……。

2.

ワタ氏は寢床の中で半身を起こしたまま、もう長いこと考えこんでいました。あれは夢だったのだろうか。夢にしては、あまりにも鮮明でした。不思議だ、こうして生きているなんて。毛髪の焼ける音も耳にしたし、自分の身体が燃え上がっていくのを、目にしたではないか。それにしても、少しも焼かれる苦しみを感じなかったのは……やはり夢なのかしら……いや、その時すでに死んでいたのかもしれない。あの窒息するような息苦しき、あれは夢とは思われない。そして、目覚めてから何度もくり返したことだが、またもワタ氏は部屋のあちこちを、不安の眼で見回しました。

確かに、寝る前と変わらないワタ氏の部屋でした。何ひとつ違っていません。……あたり前のことだが、あれは夢だったのだ。おれの頭はどうかしているらしい。こんな自明なことを……。もうすぐ陽が昇る。朝の光が、おれの馬鹿げた妄想を、きれいさっぱり吹きとばしてくれるだろう。……あれは牛乳屋の音だ。現実の音だ。もうすぐ、このいやな不安からも解放されるさ。

しかし、その日一日、誰が見てもワタ氏の挙動は、少々奇妙に思えたに違いありません。

3.

夜でした。たくさんの人々が駈けだしてゆきます。ワタ氏も、自然人々に従って、駈けだしていました。駈けるにつれて、あたりがしだいに明るくなってきました。どこから射すとも知れない、血のような光で、人々の顔は真っ赤に染まっていました。と思うと、突然、ゴオという音響とともに、巨大な火の柱が眼前に立ちのぼりました。思わず、群集の輪は広がりました。しかし、ワタ氏はひるまずに、火の中へ突進してゆきました。炎がワタ氏の身体をなめるように包みましたが、ワタ氏は不思議と熱さを感じませんでした。すっかり火焰に包まれてはいましたが、見覚えのある階段を上り、見覚えのある扉を開くと、そこにワタ氏の部屋が現われました。部屋の中央には、いましも火焰にのまれんとしている、一人の寝巻き姿の男が横たわっているのが、みとめられました。その髪は焦げ、肉は焼けていました。しかし、その肢体は天へ仰向いたまま、身動きもしませんでした。それから、大音響とともに、その男の上にも、ワタ氏の上にも、火の粉が雨あられと降りそそぎました……。

ワタ氏にはすべてが理解できました。今朝目覚めた時、ワタ氏の頭はその考えでいっぱいでした。ワタ氏は、確かに、火にまかれて死んだのに違いありません。なぜならワタ氏は、実際に、煙で窒息死する苦しみを味わいもしたし、また自分の死ぬのを目撃さえもしたのであります。ワタ氏は前々日の晩に死んでいる。もしかしたら、昨夜も……。

いや、毎晩死んでいるのかもしれない。それに気づかないのは、我々の意識は、次元を超えて持続するからだ。……そうは言えないだろうか。おれは昨日という日には死んだ。そして今、今日という時の流れの中に生きている。なるほど、そうだ。まったくそのとおりだ……。

そうになると、このおれの葬式が、どこか別の世界で行なわれてるに違いあるまい。いや、まてよ。人が眠るといえるのは、その実死ぬことではないだろうか。そして、眠りから覚めるたびに、新しい世界に生まれ変わっている。しかし、人間の意識だけは、死なずに持続するから、そのことに気がつかないのだ。そうだ、まったくそうに違いない、ホイレカ！なんという大発見だ！人間は不死だ。いや、不滅だ……。

ワタ氏は、不滅の神になったような気がしました。

*語注：heureka ホイレカ。アルキメデスが浮力の原理を発見した時に発した言葉。ヘウレカ、ユリーカ eureka とも。

第7話 シャカ

やよいのある日、道を歩いていると、M氏は奇妙な男と連れになりました。埃だらけの、ボロのような布を身にまとった坊主でした。今どき托鉢なんかには歩く坊主なんて、この辺では聞いたこともありません。旅の途中なのかと思いましたが、その歩きぶりが悠然としていて、目的などあるように見えないので、M氏はきっと乞食の一種なのだろうと思いました。それにしても堂々たる体躯だ。西郷さんとまで行かなくとも、それに近い悠々迫らざる感じで、荷物もなにもなく、大手をふってのして行く。頭の格好がまた見もので、大きな大仏頭だ。大仏頭という形容は、形ばかりでなく、髪が生え方までそうで、つまり蜂によってたかって刺されたかのような、例のコブだらけの頭でした。

実際、仏像がボロを着てのし歩いたら、そのままの格好だろう。一体誰だろうと思ひ、M氏は好奇心のままに跡をつけてゆきました。やがて道の傍らに校門が見え、中学か高校の校舎が建ち並んでいました。坊主は校門に入ってゆきます。はて、学校で物もらいのつもりでしょうか。興味をそそられて、M氏も入ってゆきました。ちょうど新学期の始まる日で、校内はまだクラス替えやなにかで、ゴタゴタしているようでした。校舎の靴脱ぎ場から、坊主はずかずかと上がってゆきます。風体からして、教師なんぞであるはずはない。一体何のつもりだろう。M氏もずうずうしく、坊主の後から上がってゆきました。

中途な時間なのか、どこの教室でも生徒がワイワイ騒いでいます。坊主はとっつきの階段を上ってゆきます。すれちがう生徒は、教師だと思って、頭を下げたりなどしています。M氏は坊主の少し後について二階へ上り、最初の教室の入口で立ちどまって、中をのぞきこみました。教室の中にはかなりの生徒が散らばっていましたが、坊主が入ってきたので、何かと坊主の方へ集まってきました。全員が坊主の顔を真剣に見上げて、坊主が何か言いだすのを待っています。坊主はすっかり教師になりきって、校庭に集合、と野太い声を張りあげました。生徒たちはバラバラと駆けだし、扉口をぬけて、階段を走り下りてゆきました。空になった教室を見回し、満足気にうなずき、そして背中に隠れていたM氏の方へ顔を斜めに向けて、にたりと笑いました。

M氏には彼の魂胆が分かったような気がしましたが、黙って立っていました。坊主は教室の机の間を回って、机の中を覗きこんでいます。何かめぼしいものがあると、すばやく服の下に隠しました。最後に紙バッグに入った衣類を見つけて、それを手にさげて、M氏の方へもどってきました。M氏はバッグを受けとり、一緒に並んで階段を下りました。M氏はいつの間にか共犯にな

った。……の……を……へ……が……が……に……を……か……ら……る……た。……は……を……向……に……入……て……
ってしまったのに驚きましたが、あとの祭りでした。

一緒に校門を出て、一緒に歩き出しながら、思わず二人、声をそろえて笑いだしてしまいました。その時、ふとこの坊主が何者であるかが、おぼろげにひらめきました。昔インドの国に釈迦という坊さんがいましたが、こいつはそのお釈迦さんにそっくりだ。きっと釈迦のなりすましに違いない。そこで以後は、坊主をシャカと呼ぶことにしました。

途中で紙バッグの中身をあらためると、ジャンパーが二着、長靴が一足、体操着が一揃い出てきました。シャカはこれまで、すりきれたワラジのようなものを突っかけていたのを捨てさり、長靴にかえました。衣の上にジャンパーの一着を重ねたので、なにやら珍妙な格好になりました。M氏はもう一着のジャンパーと体操着の分け前に与り、これまで着ていた薄っぺらなジャンパーを脱いで、ついでに体操着に着換え、ふかふかしたやつを上羽織りました。ところが、体操着の下のやつが半パンなので、M氏の方も坊主に劣らず、珍妙ないでたちになってしまいました。というのも、M氏は穿いていたやつを、シャカに取り上げられてしまい、シャカはそれを持って道端の駄菓子屋に入り、アンパンなどと取り換えてしまったからです。

アンパンをかじりながら、二人道を行くと、婀娜っぽい鬚姿の姐御が、両袖に手を通して、丸めた背中に、むっちりした尻をふって、追いぬいてゆきました。シャカが見逃すはずがありません。すぐに、なれなれしいやりとりが始まりました。M氏は二人の間になるような位置で、少し下がって歩きながら、話に聞き耳をたてました。

女は、これから、ちょっと先の道端の小屋で開かれている、賭場へゆくところだ、と言いました。いけ好かない男ばかりで、最後は乱暴されると相場の決まったあたいだけど、どうしてもこれだけは欠かせない、あんた用心棒になって、あたいを守っておくれでないかい。シャカはもう女の腰に腕をまわして、ウンウンうなずいています。やがて道の左側に、小さなほったて小屋が見えてきました。一畳ぐらいの広さしかない、農具のしまい場のようなちゃちな小屋だ。女はシャカから離れて、スタスタ小屋に近づいてゆきました。前に立つと、しばらく二人の連れの寄ってくるのを待ってから、ガラッと半分くさったような戸を開けると、中には人相の悪そうな博徒どもが、もう所狭しと詰めていました。

M氏が、どうやって割りこんでいけるんだろうと思っていると、女が入りました。入ると、ちゃんと場所があったらしく、もう坐っています。M氏もつられて踏みこもうとすると、親分らしいすごみのあるのが押しとどめて、戸を閉めようとしています。閉められてなるものかと、戸口で踏んばって、男ともみあいました。中ではもう乱行が始まったらしく、どたばたする気配がします。親分は立ち上がり、M氏を突きとばした拍子に、M氏が片腕にしがみついたので、一緒に外へ転げ出てしまいました。

M氏が立ち上がり身構えると、親分はすごい顔をして、戸口の前に仁王立ちしています。これはとても取っ組みあって勝てる相手ではない。M氏はパッとかがんで、小石を拾いあげました。敵の顔に向けて投げつけました。当たってもひるみません。また拾ってぶっつけました。何度もぶっつけました。相手にぶっつけ返されるのを恐れて、どんどん投げつけました。小石は親分の顔に何度も当たっているのだが、少しもまいりません。まだ仁王立ちして、つかみかかってきそうでした。

M氏は恐ろしさに泣きそうになって、ポケットをさがりました。ナイフがありました。右手に握って、突進しました。腹に、いく度も、いく度も刺しました。敵はまだ倒れません。助けてくれ！ M氏は悲鳴をあげそうになって、シャカの方を目で探しましたが、坊主め、いち早く逃げ出したとみえて、どこにも姿が見当りませんでした……。

第8話 後宮からの逃走

暗い穴ぐらの奥では、女達が泣いている。
一人は裸で、男に裏切られ、身をよじるようにして嘆いている。
一人は傍らで、じっとその様を眺めている。
もう一人の女は陰の中で、いるのかどうか分からない。
彼はその裸で、もだえている女を救えるのは、自分だけだと思った。

彼は男が女を裏切る場面を、心待ちにしていた。

その場面はまるで芝居のようにやってきた。

男は嬉々として、もはや女に何の愛情も支払えないことを、宣言したのだった。

彼は自分の出番が来たことを知った。

裸の女は女優のT・Kだった。

T・Kは今では裸になるようなアクトレスではなかったが、

売れない頃、一度だけ裸になった。

彼はその一度だけのイメージを、いつまでも保っていたが、

今やっと、昔のT・Kにめぐりあえたと思った。

T・Kは照明の加減であったろうか、百姓女のように小麦色の裸身をくねらせて、

腰のかげりをかばうようにし、

かえてアクセントのない尻の拋物線を見殺しにしていた。

彼はT・Kの平凡さに惹かれたのだった。

T・Kの顔はむきだしの玉葱のようだと、つねづね思っていた。

おもての皮の下には、どこまでむいていっても、同じ顔が隠されているだろう。

T・Kの喋り方は、演じている時でも、普段でも変わりがなかった。

日常でも演じるように生活し、

また普段生活するように演じているところに、彼女のみどころがあった。

だから彼は今、

今穴ぐらの底で泣いているT・Kが、本物の涙を流しているのか、

または人に見せるためのふりをしているのか、

確実に判定する自信も、またその必要も持たなかった。

彼はただ、永いこと待っていたチャンスが、今やってきたのだという、

幸福感に酔っていた。

彼は、どうして穴ぐらの底に降り立ったのか判らないほど、仕合せだった。

彼がそばによると、彼女と一緒に嘆いていた影の女達は、どこかへしりぞいていった。

今T・Kをふったばかりの男が、上機嫌に他の女との逢引に出かけていく。

男はそれと判るように、あてつけがましく花束を手にはしている。

倒れているT・Kには、気がつかないふりをしている。

彼は満面に喜色を浮べている、かつてのT・Kの情夫に感謝した。

ことはすべて、筋書どおりに運んでいた。

彼はただ、裸の女に手を差しのべさえすればよい。

そして二人でしめし合わせでもしたように、手に手を取り、

この穴ぐらから、

この町から駆け落ちするのだ。

.....

町から脱けだすのは、ずいぶん芸当だった。

町では丁度その晩、神聖な祭りが行なわれていて、

男という男、

女という女は、死の罰をもって、行事に参加することを強要されていた。

この町の目に見えない支配者達は、

テグスを操るように、町の人達の手足を、自在に動かしていた。

年に一度のこの行事では、

男と女はそれぞれ別の集団に隔離され、

男は男の、

女は女の、身体的一斉教練を受け、

それに参加しない者はもちろんのこと、

男女が一緒にいるところを見つけた場合は、

——いまだかつて、そのような恐怖は、この町の住人のよく耐えうるころではなかったが——

その者達の身に、いかなる運命が、見えない政府より下されるか。

想像するさえ、身の毛がよだつのであった。
少なくとも、彼の頭の中の恐怖は、そのように強大であった。

ジャングル・ジムのような建物の、垂直の壁面を、
彼と彼女は軽業師のように降りねばならなかった。
丁度鉄棒の上に坐っている者が、腰を滑らせて、前のめりに落ちるような、
そんなふうな仕方、壁面に背を向け、一段一段すべり下りるごとに、
彼の心臓は縮まり
勇気は萎えるのだったが、
彼の背後には、彼女の息吹が鳥のように羽搏いていた。

はたして地面に降り立ったのか、
墜落したのかも、覚えはなかったが、
彼と彼女は、町のはずれに向かう坂道を、
あえぎあえぎ登っていた。
ふと崖のようになった下をのぞくと、
町の少女達が集まって、集団演技の教練をうけていた。
彼はその少女達の一人として、本来そこにあるべき彼女を、かどわかしているのだ。
少女達はブルマーをはき、
白い体操シャツの下に、早熟な胸もとを息づかせていた。
彼は見てはならないものを覗いている、泥棒のようだった。
しかも彼は、学校をずるけた生徒のようにも不安だった。
町の男たちが今一学校の生徒がうむを言わず朝礼にかりたてられるように一
今男たちがある場所で、一つのことに共通の存在を意識している時に、
彼は寝坊した生徒のように、パニックにとらわれていた。
寝坊した小心な生徒のように・・・
彼は今、自分が逃亡しているのか、
あるいは時間の後れを取り戻そうとして喘いでいるのか、
その判別を失いかけている。

町のはずれには、たくさんの鉄のパイプが、ハードルのように生えていて、
そのこみいった迷路の中を、抜けていくのは、並大抵ではない。
彼女は羽搏きのように、彼の後をついてきていた。
彼はふりむいて見なかったが、自分の影が自分の後を走ってくるように、
女の存在を、疑いない気配として感じていた。
彼が喘ぐ時には、女も喘いでいた。
彼が懼れる時には、女も懼れていた。
彼と女とは一体であった。
時には彼は、彼自身の背後にいて、彼を追っていた。
彼の逃亡をせきたて、
彼のパニックを無表情に笑っていた。

町の者達には、これまで見とがめられずにすぎたが、
町の境界が近づくにつれて、懸念はましていく。
鉄パイプのハードルの間を、一本の細道が抜け、
ハードルの森を越えたところで、
小さな池と、池のほとりの亭（あずまや）との横をすぎ、
郊外の原へとつづいている。

彼は今、狂気のように池のほとりを走りすぎ、
亭の前を駆け抜けた。
亭には茶人達が、いくたりかくつろいでいたが、
特に彼を見とがめるでもなく、
また彼も郊外へ出た嬉しさに、

彼らのことは目に映らなかった。
小道は緑の草地の中へ消えている。
勢いづいた彼の足は、草にからまって、倒れそうになったが、
倒れまいとして、彼の体はくるくると回転をはじめ、
たちまちスピードが増して、一個の独楽となって、
草地を引きずるようによろめいていた。

独楽となってしまっただけでは、もはや走ることも思うにまかせず、
十米ほど、土を掘るように進んだところで、枯れ木にけつまずき、
ぶんぶん回転したままで、地に転がった。
彼女の魂も、同じく独楽になったのであるか、
彼はひどく眩暈がして、はっきり考えられなかった。
独楽になったのは彼のようでもあり、彼女のようでもある。
独楽になった彼を見て、笑っているのは彼女であるか。
独楽になった彼女を、悲しんでいるのは彼であるか。
それとも、独楽になった瞬間、
彼の考えは、独楽になった彼から離れて、
独楽になった彼を、どこからか彼女と一緒に眺めているのでは。

とにかく罰は下った。
彼であった独楽は、立ち上がろうとして、
いまだにぶんぶんもがいている。

(「続・モーグルズ・フェイブルズ」了)